

「マダム」・バタフライをこえる試み―ヨネ・ノグチの「ミス」・モーニング・グローリー

I 日本人が書いたアメリカ大衆小説

山口 ヨシ子

一九〇一年十一月号と十二月号の『フランク・レスリーズ・ポピュラー・マンズリー』に連載された「日本の少女のアメリカ日記」(“The American Diary of a Japanese Girl”)には、挿絵画家エトール・ゲンジローの名前が記載されているものの、作者の名は明らかにされていない。これは、ヨネ・ノグチこと、野口米次郎(一八七五―一九四七)がアメリカ滞在中に英語で書いた小説であるが、朝顔(モーニング・グローリー)と名乗る日本女性が自らのアメリカ体験を日記で綴るといふ形式をとり、作者については、あくまでも匿名性が保たれている。いずれの号のタイトルページにも、挿絵画家の名前だけが書かれているのである。

この小説は、雑誌購読者を刺激する「明確なプロット」^{〔1〕}がないため長期連載には不向きだという編集長エラリー・セジウィックの判断で『ポピュラー・マンズリー』には圧縮版が掲載され(『手紙』六二二、翌一九〇二年に、フレデリック・ストークス社から同じタイトルで完全版が出版されたのであるが、その際には、ミ

ス・モーニング・グローリー (Miss Morning Glory) と主人公の名前が作者名として記載されている。若い日本女性によるアメリカ体験記という形式のなかで、男性作家は女性の名の陰に身を隠したことになる。ヨネ・ノグチの名ですでにアメリカで詩集『見界と幽界 (The Seen and Unseen)』(一八九七)などを出版していたためか、あるいは、短文を羅列した英文で書かれていたことによるのか、当時の書評のなかには、この作品が彼の手によるものではないか、と推察しているものもある(「外国通信社の意見」二、四)。何よりも、作品自体が男性作家の視点をうかがわせる箇所を内包してもいる。だが、アメリカの文学市場にでまわった作品は、日本女性作家による日本女性の物語というスタンスを貫いたことになる。

しかし、このようなスタンスが守られているところにこそ、二十世紀への転換期のアメリカにおいて、作家として成功することが可能であったということの証にもなる。作品冒頭で朝顔は、アメリカの雑誌に女性の挿絵が溢れていることを指して「アメリカは女の国である」と指摘し、日本について書かれた新聞を読み、「今こそ、日本娘の時代だわ」と叫んでいる。当時アメリカにおける定期刊行物の普及はめざましく、一家に四冊の割合で読まれていたが(ホーニー ix)、実際、オノト・ワタナ(一八七五—一九五四)などは、自らを日本人に見せかけ、日本女性についての物語を雑誌などに発表して作家として身を立てることに成功していた。イギリス人男性と中国人女性との混血であったにもかかわらず、奇妙な筆名と着物らしきものを着た自身の写真を公表するなどして日本人との混血であると読者に思わせ、一九〇一年には日本女性ユキを主人公にした『日本鶯 (A Japanese Nightingale)』を出版し、作家自身の申告によれば、二十万部以上を売りあげていたのである(ホーニー、コール 五)⁽²⁾。この作品はその後一九〇三年にはブロードウェイのデイリー劇場で上

演されたばかりでなく、一九一八年には映画化もされている（五、一七四）。朝顔が指摘するとおり、日本女性の物語は、当時のアメリカでは「売れる商品」だったわけである。

ノグチが滞米中に書いた英文の手紙によれば、当時、彼はきわめて生活に窮しており、自分の物語が雑誌に印刷され、本として出版されることで金を得たいと強く願っていた（『手紙』四〇—四二）。金ばかりでなく、「故郷に錦を飾る」ためにアメリカで成功したいとも願っていた（ドウス 三五、『手紙』六三）。一九〇〇年六月十九日付けの友人宛の手紙では、すでに「混血の日本人」としてのワタナの活躍を間近で見ていることがうかがえることからすれば（『手紙』四四）、新聞に記事を書き始めていたノグチが、ワタナのように日本女性の物語を書いて富と名声を手に入れたいと考えたのは、自然のなりゆきだったといえるだろう。「僕の日記が雑誌に掲載されたらいいのになあ」と友人に書き、購読者数の多い雑誌に掲載されれば、高い稿料も見込めるとさえ計算していたのである（『手紙』四〇—四二）。ノグチの名前をださず、日本女性による日本女性の物語であることを見せかけることに、市場を意識した編集者の意向が強く働いたことはまぎれもないが（『手紙』六三、六八）、作品自体、そのような演出が可能ないように書かれていたこともまた事実だったのである。名声を確立することを望んでいたノグチが、名前を隠さなければならなかったことは皮肉であるが、帰国後の一九〇四年に東京で同書を出版したときには、自分の名前を記載したばかりか、アメリカにおける同書の比較的良好な書評ばかりを集め「外国通信社の意見」として巻末につけていることから、日本に錦を飾るために、アメリカでの金銭的・社会的成功を目指して日本女性の物語を書いた、という意図が伝わってくるのである。

二十世紀初頭のアメリカで、日本女性の物語がいかに大衆読者層に浸透していたかは、「アメリカ日記」が

掲載された当時の『ポピュラー・マンズリー』を数号見ただけでも明らかである。この雑誌は、アメリカにおける「挿絵入り新聞のパイオニア」⁽³⁾と呼ばれていたフランク・レスリーが一八七六年に創刊した月刊誌で、カラーを含む大量の挿絵を掲載しながら一部十セントという廉価で大衆の人気を得ていたが、創刊二十五周年記念号と銘打った一九〇一年十一月号から翌年の四月号までの六ヶ月間を例にとっても、日本女性のことが多々とりあげられている。

朝顔の物語がカラーの挿絵入りで二ヶ月連載されたほかに、ワタナによる日本人女性とアメリカ人男性との長崎における奇妙な結婚生活を描いた短編「化粧品入れ」が同じくエトーの挿絵付きで掲載されている。最新の本を紹介する欄では、イギリス人作家クライブ・ホルランドの『私の日本人妻』(二八九五)や『娘』(一九〇一)について言及され、彼のコレクションから「日本の少女」と題した着物姿の若い娘の写真がホルランド自身の肖像とともに掲載されている。ホルランドの肖像写真の横では、ノグチの「日本少女のアメリカ日記」の完全版が、新しい挿絵を加え、「きわめて日本の魅力にあふれる装丁で」出版される予定であるとの告知もある。朝顔は、雑誌版・完全版のいずれにおいても、日本女性を描いて人気を得ている作家の作品を批判し、アメリカでは作家が「中国人の洗濯屋ほどに多くいる」⁽⁴⁾ので価値がないと述べているが、とくに、日本女性の物語を書けば売れる土壌はできていたといえるだろう。

このような土壌は、当然ながら一朝一夕にできたものでなく、一八七六年フィラデルフィアにおける建国百年記念万国博や一八九三年シカゴにおける世界博における日本館人気などを契機に勢いをつけ、日清戦争における日本の「印象的な勝利」なども加わって、徐々にできていったようである(ホーニー、コール 一)。日

本の美術工芸品の流入にともない、ニューヨークのティファニー社は、早くも一八七一年には、日本風の陶磁器を作って特許をとり、売り始めている（児玉 六三）。一八九〇年代には、アメリカにおけるあらゆる階層の家庭で、日本風の家具などで家を装飾することが流行し、日本や日本に住む「風変わりで、エキゾチックな人びと」に関するフィクションやノンフィクションを読んでいたという（ホーニー、コール 一）。日本のモノ、人、情報が生活習慣や文化の違いをこえてやりとりされた、いわゆるジャポニズム・ブームが、フランスやイギリスなどに続いて、アメリカにも起こっていたのである（ミーチ 一八、三五、宇沢 一九、児玉 六一八）。

このような日本ブームの強力な立役者として、活字メディアの存在は無視できないであろう。アメリカにおける日本ブームは、一八七〇・八〇年代の美術出版産業の「爆発的成長」と平行して起こり、美術出版業界の貢献がなければ、そのようなブームは起きなかったともいわれている（ホースリィ 四五、宇沢 三二）。『アート・ジャーナル』『アメリカン・アート・レビュー』など、美術雑誌のおもなものは一八七四年から八四年にかけて創刊されたが、それらは永続的に日本美術を宣伝し続けたという（ホースリィ 四五）。

それとともに、より購読者数の多い『ゴディーズ・レディーズ・ブック』『スクリブナーズ・マンズリー』『アトランティック・マンズリー』をはじめとする中産階級向けの女性雑誌や一般雑誌なども、子どもの教育から陶器収集などにいたるまでさまざまな日本問題を扱い、アメリカの多くの家庭に日本に関する情報を届けたという（ホースリィ 四五、宇沢 三二）。女性向けの家庭用アドヴァイス・ブックや美術の手引書なども、日本美術について、畏敬の念をもって言及していたといわれる（ホースリィ 四六）。

バジル・ホール・チェンバレンは、『日本事物誌』（一九〇五）において、フリードリッヒ・フォン・ヴェンケンスターンの『大日本書史』（一八九五）の収録図書が数千になるとして、「日本についての本を書いていないことが、今や有名になる早道になりつつある」（六四）と述べている。十九世紀に書かれた日本や日本美術についての英語およびフランス語の本だけをとっても、家庭用アドヴァイス・ブック、旅行案内書、歴史書、文学書などを除外して百冊以上に及んでいる（ホースリィ 四五）。日本各地の学校で教鞭をとったウィリアム・グリフィスの『ミカドの帝国』（一八七六）や『知られざる日本の面影』（一八九四）をはじめとするラフカディオ・ハーン作品、さらには、日本にはじめてダーウィンの進化論を紹介したといわれるエドワード・モースの『日本の家とその周辺』（一八八五）や、女子英学塾（現津田塾大学）の設立に貢献したアリス・ベークンの『日本の女性』（一八九二）など、日本滞在経験にもとづいた著作の数々は、日本ブームの土壌作りとしてとくに欠かせないものであったに違いない。

だが、アメリカにおける日本ブームを、とくにノグチに女性の物語を書かせるにいたった背景として考えるとき、除外することができないのが、ジョン・ルーサー・ロング（一八八一—一九二七）であろう。一八九八年一月号の『センチユリー・イラストレイティッド・マンズリー・マガジン』に「マダム・バタフライ（Madame Butterfly）」を発表し、それが一九〇〇年一月には、デイヴィッド・ベラスコによってニューヨークのヘラルド・スクウェア劇場で上演され、アンクル・トム劇に続く大ヒットとなっていた（マイナー 五九⁵）。ジャコモ・プッチーニによって一九〇四年にスカラ座の舞台にまで進出し、その後世界が百年以上にわたって固定したイメージを抱くことになる、戯れの西欧人男性に愛で応える日本人女性という原型がきつ々あった

のである。デイヴィッド・ヘンリー・ホワンは、一九八六年に『M・バタフライ』で「マダム・バタフライ」を脱構築するにあたって、オペラを見る必要も台本を読む必要もなかったと語っているが（九五、ホーニー、コール 四一五）、日本が芸者を思わせる女性によって表象され、西欧人男性の性的搾取を可能にする植民地として描かれるというパターンが定着しつつあったのである。

朝顔は、ロングについて『日本少女のアメリカ日記 (The American Diary of a Japanese Girl)』において、つぎのように批判している。

「マダム・バタフライ」が私のそばにあり、読んでくれと訴えているわ。「いいえ、私、決して開かないわ。元来買ったのが間違いよ」って、私言ったの。その「マダム」というのが私、好きじゃないのよ。ロティという紳士が「マダム・クリサンサマム」という本でマダムという言葉をメチャメチャにしてから、なんだか猥褻に響くのですよ。「マダム・バタフライ」の名誉ある作者は、ロング君（間違い君）というのです（日本人はエルとアールの区別を知らないのですよ）。もちろん、彼は間違うのが上手でしょう。

朝顔の指摘をまつまでもなく、とくにピエール・ロティが自らの長崎における経験をもとに書いた『マダム・クリサンサマム』（二八八七）を発表して以来、西欧人男性と日本人女性との「結婚」と「遺棄」を扱った物語はヨーロッパで多く書かれていた（マイナー 四七―四八）。ロング自身、宣教師の妻として長崎に滞在していた姉が語った実話に（楠戸 一二）、空想を織り交せて「バタフライ」を書いたとされているが（「お待

「ちどうさま」^{xiii}）、その内容が、場面設定から人物設定に至るまで、多くの点でロティの物語の借用であることは明らかである（ヴァン・リジ 六六一―六七）。これは、当時のアメリカにおける文学市場が、ヨーロッパにおけるジャポニズム・ブームのなかで流行した、日本女性の物語、いわゆる「ムスメ小説」の影響を受けていたことの証でもある⁽⁶⁾。

ホランドの作品がアメリカの大衆雑誌で紹介されていたことは先に述べたが、ロティの物語も、一八八九年には英語に翻訳されている。ロングとワタナは、互いを剽窃者と攻撃しあっていたが（羽田 二三五―三六）、いずれもが日本を訪れた西欧人男性と日本人女性との風変わりな結婚というロティの系譜に連なる作品を書いていれば、必然のなりゆきであったといえるだろう。そもそも、日本を訪れたことのないロングやワタナが日本を背景とした日本女性の物語を書くことができたのは、それだけ日本についての情報が当時のアメリカに溢れていたということでもある（鳥越 一二五―二八）。同様の物語がくり返し書かれたことには、文学市場の需要があったということはいうまでもないが、西欧人男性と日本人女性との金を介したつかの間の「結婚」が、とくに一八五三年のペリー来航以来、実際にめずらしいことではなかったということも、またまぎれもない事実であったといえるだろう（川田 三二三、三三六）。

朝顔は、アメリカの小説に登場する日本女性が「ばかにされすぎている」ことに怒りを募らせ、それが日本のことをよく知らない、ロングやワタナのような外国人の男性作家や「唐人の作家」によって書かれているためであることを仄めかしている。人気の日本小説の主人公が青い眼であったり、冬の着物のうえに夏の羽織を着ていたり嘘が多いことを嘆き、自分こそが「ほんとうの」日本小説を書くのだと宣言してもいる。日本女

性である自分が書けば、「現実には即した」日本女性の物語が書けると主張しているのである。

ノグチの朝顔像には、当時のアメリカにおける日本女性小説ブームに便乗しようとする目論見と、そのブームの現実的成果に対する強い憤りが相容れないかたちで表れていると言ってよい。ノグチは、帰国後の一九〇七年、英文で書いた「オノト・ワタナとその日本小説」と題したエッセイで、滞米中に見たウィリアム・ギルバートとアーサー・サリヴァンのコミック・オペラ『ミカド』に対して「強い義憤」を感じたと述べ、同様の義憤をワタナとロングの日本小説を読んだときにも感じたと言っている（一九）。『アメリカ日記』は、日本の令嬢が、イェール大学出の叔父を付き添いにサンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークと旅をしつつ、アメリカを語るといふ設定になっているが、この設定こそ、日本女性小説ブームの最中にアメリカに滞在していた日本人として、抵抗の秘策でもあったともいえよう。それは、日本を訪れたアメリカ人に金で買われたにもかかわらず、愛の誠を捧げる日本女性という、ワタナやロングの小説の常套パターンを覆そうとする試みでもあったといえるだろう。その試みの真髄は、「マダム」ではなく、あくまでも「ミス」にこだわったところにあるのである。

本稿では、ノグチがアメリカの大衆雑誌に発表し、さらには単行本としてニューヨークの出版社から出版した朝顔の物語『アメリカ日記』を、同時代に日本女性を描いて人気を得ていたロングとワタナの小説との比較でとらえたい。アメリカの文学市場の要求に応えながらも、日本を訪れたことのないワタナやロングの描くユキやバタフライとは異なる日本女性のイメージを作りあげようとしたノグチの試みを追求してみたい。

II 異人種間結婚を描くということ

ロングの「マダム・バタフライ」とワタナの『日本鷲』はともに、アメリカ人男性と日本人女性との「結婚」を扱っているが、異人種間結婚のテーマはアメリカ文学においてさほどめずらしいことではない。それどころか、アメリカ文学の歴史を貫くテーマの一つともいえるだろう。十七世紀植民地時代の、先住民と白人入植者との抗争を背景とする「インディアン捕囚体験記」から、アメリカ文学は、「インディアン」や「黒人」をはじめとする異人種を「他者」として描いてきたが（大串 一六九）、そこには、セクシュアリティの問題を浮き彫りにする「他者」との「結婚」というテーマが分かちがたく結びついているからだ。「異民族をまったくの他者と見て怖気をふるう視線と、異民族を性的商品と見て、その魅力に取り憑かれる視線とが：限りなく弁別不能になる」世界、すなわち、「異民族恐怖と異民族憧憬がアンビヴァレントな論理を構成していく」世界は（巽 七六）、アメリカ文学の歴史に一貫してみられ、その重要な一部を形成しているのである。一六六一年から一九六七年まで、アメリカには人種をこえて結婚することを禁止する法律が存在していたにもかかわらず（クルツ 一）、または存在していたからこそ、異人種間結婚は、文学の世界に素材を提供し続けてきたということであろう。

たとえば、大衆読者に安価で手軽な娯楽を提供することを目的として、十九世紀後半に興隆したダイム・ノベル（十セント小説）は、嫌悪や蔑みを抱きながらも、未知なるものへの関心と憧憬を満たす存在として異人

種を描き、広く読者の関心を誘うことを常套手段としていた。白人男性と結婚して男の子をもうけたインディアン女性の苦悩の生涯を描いたアン・ステーブンスの『マラエスカ 白人猟師の妻となったインディアン』（二八六〇）が、出版を産業にしたといわれるエラストラスとアーウインのビードル兄弟によるダイム・ノベル第一号となり、数ヶ月で六万五千部、最終的には三十万部売れたことを考えれば（ハート 一五四）、異人種間結婚のテーマがいかに大衆読者の需要にそったものであったか、ということの一つの証となろう。

このことは、白人と黒人との結びつきについても同様であった。黒人女性奴隷が白人男性の性的欲望の対象になるといふことは、十九世紀に数多く書かれた「奴隷体験記」の核心の一部となっていたばかりでなく、一滴でも黒人の血が混じれば黒人とみなされ、異人種間結婚が認知されない社会状況のなかで、白人と黒人との性的関係は、小説の新たな題材となったからである。

十九世紀中葉には、世界的ベストセラーとなったハリエット・ビーチャー・ストリーの『アンクル・トムの小屋』（一八五二）をはじめとして、奴隷制をめぐる文学が多々生まれたが、その底辺を貫いているのは、異人種間結婚の問題である。とくに『アンクル・トム』に反発して数多く書かれた奴隷制擁護の文学は、たとえば、メアリー・イーストマンの『アーンスト・フィリスの小屋』（一八五二）の例にもみられるように、異人種間結婚への嫌悪と恐怖に貫かれている。その偏見は反奴隷制小説においても完全に免れることはできず、白人男性の黒人女性奴隷への性的迫害を中心に据えた『アンクル・トム』においてさえも、白人と黒人との共存は模索されていない。『アンクル・トム』から十数年を経て出版されたリディア・マリア・チャイルドの『共和国のロマンス』（二八六八）では、白人と黒人との結婚が何組か描かれ、異人種間結婚が人種の壁をこえる手段と

なっているとところに新しさがある。だが、そのような結末にいたる過程では、愛によって結ばれたと思っていた黒人と白人との混血女性が、子どもを身ごもったところで、白人の夫には本妻も子どももいて、自分が奴隷の「妾」にすぎなかったことを知るといって、「マダム・バタフライ」に酷似した異人種間結婚が描かれているのである。

二十世紀への転換期に多く書かれた日本女性の物語では、それまでのアメリカ文学で描かれてきた異人種間結婚が、インディアン女性や黒人女性などに代わって日本女性におき換えられたかたちで成立しているといえよう。異人種を他者として蔑みながらも、風変わりであるゆえにより性的幻想を誘発するというエキゾチズムへの熱い視線は、歴史的な流れを背景に、はるか日本まで到達したということであろう。ロングやワタナの小説において、日本女性の話す英語が黒人訛りを呈していること、また、日本女性が「野蛮人」や「奴隷」とさえ言及され、白人男性との金を介した「結婚」を斡旋する日本人の仲人が、奴隷商人のようなイメージをもって描かれていることは、日本女性の物語が、アメリカ文学における異人種間結婚の系譜に連なっているといえよう。少なくとも、当時の文学市場を支えていた白人中産階級層の読者にとっては、白人男性とインディアン女性や黒人女性との結びつきに続く、新たな異人種間結婚のテーマであったといえるだろう。

ノグチの『アメリカ日記』がロングやワタナの小説ともっとも異なっているのは、一つには、異人種間結婚をその中心から排除していることにある。「バタフライ」と『日本鷲』は、ともに社会的・経済的に優位な立場にある白人男性と、苦境に立つ有色人女性との結婚を主要テーマとし、その組み合わせにおいて、それ以前のアメリカ文学が描いてきた大方の異人種間結婚のパターンを踏襲しているといえる。だが、『アメリカ日記』

においては、主人公が人種をこえて結婚することはない。ロマンスを盛り込んだ方が売れる作品になるという、友人の文芸記者ブランチ・パーディングトンの勧めにもかかわらず、ノグチは、アメリカに着いたばかりの日本女性に恋愛の機会がないのが自然だという主張のもとに（『手紙』 四〇）、意図的に「バタフライ」や『日本鷲』とは異なる男女関係を描いているのである。朝顔は、「あらゆる仲人を入獄させてもらいたい」と言いながら、主体的に夫となるべき男性を選ぶという姿勢を貫いている。アメリカ人男性との付き合いは描かれるものの、その付き合いさえも朝顔にとっては、アメリカ見物の一環でしかない（宇沢 二八）。アメリカ小説で「ばかにされている」日本女性を例にだし、「アメリカまで来ててもあそばれたということにならないように」と、アメリカ男性の愛の告白を制しながら関係を絶つこともなく、彼の心を逆にもてあそんでいる。つまり、主体はあくまで女性の側にあり、ロングやワタナの小説における男女の力関係を逆転しているのである。

朝顔が、バタフライやユキのようにアメリカ人男性の性的商品にならずにすむのは、彼女が明治の新しい教育を受けた金持ちの令嬢と設定されているためである。アメリカ見物にだけ行って行くだけの経済力や家柄に恵まれている日本人エリートとして描かれ、当時の日本女性小説のステレオタイプともいえるべき、没落した家の家計を救うために芸者になるという設定や、金によってアメリカ人男性に「買われる」という設定からも自由なのである。バタフライもユキも、アメリカ人男性に向ける思いは純粋なものとして描かれ、ロマンスのヴェールに包まれてはいるものの、男女間に歴然とした地位的・経済的格差が存在していることで、二人はともにアメリカ人男性の性的幻想を満足させる商品になっている。芸者らしき女性がその「小さき」身をもって「奇妙な」日本文化を表象し、西洋人男性による性的搾取の対象となることで、いずれの作品も、エドワード・サイ

ードのいうオリエンタリズムの兆候を示しているのである（二〇六―二〇七）。それに対してノグチの物語では、日本女性が自らの資産を用いてアメリカ見物にでかけ、新しい経験を積むための一つの試みとして主体的にアメリカ人男性と付き合う点において、ロングやワタナの小説にみられる性的オリエンタリズムの構図をくつがえしているといえるだろう。

『アメリカ日記』で異人種間結婚がまったく描かれていないわけではなく、朝顔がアメリカで交流する日本領事には、アメリカ人の妻がいるという設定になっている。ロングやワタナが描く異人種間結婚とは、夫と妻の性が逆になっているわけだが、これには大きな意味があるといえよう。西洋を男性、東洋を女性ととらえ、西洋にとって東洋が性的幻想を満たし、侵略可能な存在として表象されるという図式が崩されているからだ。

『アメリカ日記』における異人種間結婚が、当時の日本女性の物語のなかでも異色であったことは、たとえば、ワタナの『日本のミス・ヌメ』（一八九九）におけるそれと比較すれば明らかであろう。『日本鷲』の二年前に出版されたこの作品では、アメリカ人男女と日本人男女四人の恋愛が交差する状況が描かれているが、アメリカ人男性と日本人女性とは結婚するものの、日本人男性とアメリカ人女性は結婚することはない。アメリカ人男性と結婚する主人公の日本女性ウメは、ただどしどしい英語で「私、キスできる、シンクレアさまが教えてくださる」とさえ発言するが、日本男性がアメリカ人女性にプロポーズしても、キスすることがないばかりか、身体が触れることもない（シエイ 二）。

このような状況は『日本鷲』においてもみられ、アメリカ人男性が仲人に引きあわされた主人公のユキとキスする場面が描かれる一方、日本人男性がアメリカ人女性と結婚することはなく、その発想そのものが大胆と

みなされている（シェイ 三）。女性が「商品」とみなされ、男性はそれを所有することで性的満足を得るといふ白人家長制の権力構造からすれば、白人女性は有色人種の男性にとって、特別な性的満足を提供する「高品質の商品」となり得るため、彼らが「使用」したり、「征服」したりしないよう注意が払われているのである（ステムバー 一四四、シェイ 三）。ワタナの小説では、当時のアメリカで多くの白人男性が抱いているたと思われる偏見の枠内で異人種間結婚が描かれているといえよう。ロングの小説が同様の偏見のもとに書かれたということは、バタフライとピンカートンのキスシーンが描かれる一方で、登場するただ一人の白人女性が、ピンカートンの妻であれば、言うまでもない。

『アメリカ日記』で描かれるのは、日本人男性とアメリカ人女性との異人種間結婚であり、白人家長制の視点に立てば、「外部の」有色人種男性によって自分たちの商品を利用され、征服されたかたちであるが、それがユーモアをもって描かれている。日本領事のアメリカ人妻が夫より数インチ背が高いことを指して朝顔は、二人が似合いの夫婦ではないと言い、その「ちぐはぐさ」を「借着の羽織」にたとえている。領事の様子を「まるでワニでも連れてくるかのように自慢そうにみえた」と揶揄してもいる。この領事のモデルは、一八九八年から一九〇一年にかけてサンフランシスコの日本領事館長を務め、イギリス人女性と結婚していた陸奥広吉であったといわれるが（マークス 一六四）、ノグチがどの程度の意識をもってこの異人種間結婚を描いたかは不明である。だが、女性の方が小さくあるべきという通念からは逃れられないものの、当時の日本女性小説を支配していた異人種間結婚とは異なる組み合わせを描き、そこにユーモアの色合いを加えたところにノグチの新しさがあったと言うべきだろう。

アメリカ文学の歴史において、有色人男性と白人女性による異人種間結婚が描かれなかったわけではなく、たとえば、十七世紀のニューイングランド植民地を背景にした、チャイルドの『ホボモック 植民初期の物語』（一八二四）では、インディアンの男性と駆落ちをして男の子どもを産む白人女性が描かれている。結末は、インディアンが身を引き、女性は白人社会に戻るが、この異人種間の結びつきが好意的に描かれている点できわめて斬新であった。だが、ヴィクトリア朝的女性観が支配した十九世紀を経て二十世紀に向かう時代のなかで生みだされた日本女性の物語では、白人男性と有色人女性との結びつきが圧倒的で、ノグチが描いたような異人種間結婚や朝顔のようなロマンスに無縁の主人公はまれだったといえるだろう。朝顔を結婚させることがなかったのは、アメリカで結婚式を見たことがなかったという単純な理由もあったようだが（『手紙』 四一）、できあがった物語は、結果として、ロングやワタナの描いた日本女性の物語とは異なった異人種間結婚への姿勢を示すことになったのである。

Ⅲ ロマンスを「える手立て」としてのユーモア

主人公に恋愛や結婚の機会を与えずに、大衆読者の関心を誘う手立てとして、ノグチが用いたのはユーモアであった。これはロングやワタナの物語の基調となっているセンチメンタリズムと対極をなす特徴といえよう。『アメリカ日記』の中心を占めるのは、日本女性がアメリカにおける異文化体験を率直に語ることで巻き起こるユーモアである。朝顔は「変化はとても楽しい」と公言して、積極的にさまざまな新しい体験に挑み、いず

れにも斬新な意見を述べている。長期連載ではなく、圧縮版を掲載することを決断した『ポピュラー・マンズリー』の編集長セジウィックは、『アメリカ日記』の長所が「きわめて愉快な躍動感や獨創性」にあるとノグチ宛の手紙で書いている（『手紙』 六二）。当時の書評のなかにも、作品のユーモアについて言及しているものがあり、『ニューヨーク・トリビューン』紙の書評では、朝顔を指して「具体的な事物に対する鋭い眼識とオリエンタルらしからぬユーモアのセンス」の持主と評している（『外国通信社の意見』 一）。「オリエンタルらしからぬユーモア」という表現には、当時人気を博していた日本女性小説の感傷主義が逆に示されているといえるが、この書評には、「賢い日本人が日記を書いた目的は一つで、それは日本が芸者をこえる女性を生みださうる国だということを暗愚に知らしめること」（一）とある。これこそ、作者の意図を明確に読みとった、あるいは作者を喜ばせた書評といえるだろう。賢い日本人女性による鋭い観察力や洞察力に裏づけされたユーモアが展開されているからである。

朝顔の異文化体験が巻き起こすユーモアは、一つには、アメリカの「大きさ」や機械文明の発達に対する驚異とその分析によって引き起こされるものである。彼女はアメリカ到着直後から、「すべてが大がかりで」「大陸的なので」「小さい島国」である日本とは違っていると驚きをみせ、日本との比較で独自のコメントを詳細に記録する。滞在するホテルが巨大な「宮殿のよう」で、化粧室だけでプライバシーを保てる個室として機能することを喜ぶ一方、「女中」の接待もなければ、客を迎える花も絵もないと、その無機質さにとまどいもみせている。「寝ている間も運動しているような」柔らかいベッドに難儀して「固い床に横たわる」日本の習慣を懐かしんだり、用事もないのに何度もエレベーターを試して、それが「足のない幽霊が消えていくため日本

の芝居で用いるせりあげと同じ仕組のようだ」と分析したりもする。指でボタンを押すだけで居室に電気がつく満足感を「こんな小さい東洋人の指でもエジソン先生の大きい指の先のようにどうして電気をつけることができるのかと不思議に思うのです」と表現し、文明の利器に驚く様子も率直に語られている。「日本は三世紀遅れていると言わざるを得ない」という朝顔のコメントにもあるように、若い日本女性がアメリカの「科学的モダニズム」を体験する驚きを伝えるとともに、それを日本文化との比較でコメントすることで読者にユーモアを誘っているのである。

ユーモアはアメリカ批判の表し方にもみられる。朝顔はアメリカ文化を無条件で礼賛しているわけではなく、彼女を幻滅させるアメリカをもつぶさに記録している。「空を覆う煙」「波止場の臭気」、さらには、轢き殺されそうな電車、「商売人の国」の抜け目なさ、喜びのみを追求するアメリカニズムなど、彼女を幻滅させる要素は際限がなく、彼女は「私のアメリカの夢は完全に崩れたわ」と言い、「これがほんとうのアメリカですか」と問うてもいる。「私がサンフランシスコの市長だったら」と、改革案までだしながらアメリカ体験を続けていくが、表面上は、「批判をしたり、意地悪をするためにアメリカにきたのではない」という姿勢を保つ。大衆読者向けの物語で、過激なアメリカ批判を避けざるを得なかったのかもしれないが、朝顔のアメリカ批判には面白い工夫もみられるのである。朝顔が書いてゴミ箱に捨てた「通りで見かけた事柄」と題するエッセイを、拾って再現するという設定で、途切れ途切れのアメリカ批判が紹介されているからである。

破いてしまったというその批判文できわだっているのは、アメリカ女性に対する批判で、作者が男性であることをとくに思わせる部分でもある。

女どもが横浜の人力車のように走っていて：自分どもの子どもは家で泣いていて：女らしいところをどこへやってしまった：若い娘が：歩きながらせわしなくガムをかんで、東京などであんなまねでもしようものなら結婚の申込み手は一生ありやしない：派手な赤いスカートをはいたおばあさん：老人があんな若い女房と腕組んで：金と結婚するなんてまるで殉死ね：女が町をうろついて歩く政治家のように町の角で立話して：

朝顔は、まだ百行もあったが破ってしまったので読めないと言いながら、このように痛烈なアメリカ批判をくり広げている。「春の月光のなかの桜の花のように穏やかに微笑んでいる東洋の娘でいなくてはならない」と言いつつも舌鋒は鋭く、また、その視点が男性のそれを感じさせる点も面白い。伝統的な日本男性の視点を思わせるアメリカ女性批判はこのほかにも多く、「口がワニの口のように大きい」「空腹のブタのように食べる」「口に鍵がなく、ピリオドをつけることを忘れた文のようだ」など、枚挙にいとまがない。ユーモアはアメリカ批判をする隠れ蓑でもあるのだ。

朝顔の異文化体験は、食べ物やファッションから自転車やゴルフなどまでさまざまに及ぶが、そのような体験が生みだすユーモアのなかで特筆すべきは、教養に裏つけされたコメントが生みだすものである。彼女の日記は短文で綴られその流れや表現などに不自然さはあるものの、英語は教育を受けたことがわかるものであり、ロングやワタナの主人公たちが操る幼稚なブロークン・イングリッシュとは明らかに異なる。だが、異なるの

は英語だけでなく、英米文学史でさえ講ずることが出来るほどの文学的知識であり、彼女が言及する作家は、ジョン・ミルトンやラルフ・エマソンをはじめとして数十人にも及ぶ。英米の作家ばかりでなく、ソクラテスや鴨長明の名前さえでてる。彼女のこのような文学的知識は、当然ながら、ノグチ自身の文学的関心をそのまま反映しているのであるが、そのような知識をもとにしたユーモアがくり広げられているのである。

たとえば、このようなユーモアは、アメリカ人宅の図書室の場面にみられる。

私はマザー・スカイラーに彼女の蔵書から本を一冊選んで欲しいと頼みました。：

最近の本を買って表紙を眺め、中味を読まないのが流行らしいわ。出版業者は読んでもらうために出版するのではないですね。作家たちも室内装飾屋にまで墮落しているのですから恥ずかしいですよ。

スカイラー夫人は私にオマール・ハイヤームのルバーヤートを選んでくださいました。

すると叔父さまが、「アメリカ女性性はオマールとチキン・サラダに目がない」と言いました。

内容よりも表紙を眺めるのによい本を出版する出版界への批判は、日本趣味を最大限に強調した装丁で評判を呼んでいたワタナの『日本鷲』⁽⁷⁾への批判ともとれるが、そのあとで、十一世紀生まれのペルシャ詩人オマール・ハイヤームとオマール蝦とをかけた言葉遊びをしているのである。厳しい批判とジョークとを並置することで、批判を緩和すると同時に、ユーモアを引き立てている。ハイヤームの四行連詩は、エドワード・フィッツジェラルドによって一八五九年に自由な英訳がだされて以来、改訂版が何度もだされてアメリカでも人気を

博し、ロングが「バタフライ」を発表した『センチュリー』誌の一八九七年十一月号には、当時活躍していたアメリカ詩人、ジェイムズ・ウィットカム・ライリーによる「ドック・サイファーズのルバーヤート」というタイトルで四行連詩が掲載されている。このような状況を考えれば、朝顔のユーモアが当時の読者には、より強いインパクトがあったことが想像されるのである。ノグチ自身は、アメリカのハイネといわれていたウォーキン・ミラーの家に寄食していた折に『オマール・ハイヤームのルバーヤート』を紹介されたといわれ、サンフランシスコの文芸誌『ラーク』の詩人仲間からは「オリエンタル・オマールの新しい化身」と呼ばれていたという（マークス viii、一七三）。

朝顔の物語は、ロマンスを軸にすれ違うアメリカ男性と日本女性を描いたロングやワタナの物語と異なり、ユーモアを軸に日本女性のアメリカ体験を厳しい批判も交えて語り、他の日本女性小説とはきわめて異なった味わいを呈している。アメリカに渡ったばかりの十八歳の日本女性が、叔父を付き添いにしてはいるものの、言葉の壁も感じず、これほど自由にふるまえるか、これほどの観察力や文学的知識をもってアメリカ文化批判ができるか、という疑問が読者側にわくことも事実で、ノグチ自身のアメリカにおける長年の経験や文学修行を女性の名を借りて示していることは明らかである。だが、このような人物設定こそが、当時のアメリカ小説に登場する日本女性の受動性に義憤を感じていたノグチが講じた秘策であったに違いない。『女に生まれた悲劇』とは、黴のはえた古本屋にある小説のなかでのみ見られるものだ」と言い放ち、積極的にユーモアと風刺を込めてアメリカ体験を綴る朝顔の存在によって、『アメリカ日記』はセンシメンタリズムとは無縁の小説になっている。このような日本女性を描くことで、ノグチは、当時のアメリカで人気を得ていたロングやワタナ

らによる日本女性の物語と一線を画くそうとしたといえるだろう。

IV 「新しい女」としての日本女性

朝顔は、明治日本の最先端教育を受けたことを誇っているが、その言動は、二十世紀への転換期に出現した「新しい女」のそれをその根本において示している。「新しい女」とは、信心深く、男性に従順で、性的に純粹で、家庭的であるとすると、ヴィクトリア朝的「真の女性らしさ」の規範（ウェルター 一五二）を脱却した、公的領域で活動する新しいタイプの女性のことである。「新しい女」現象は、女性参政権運動の高まりを背景に、ヨーロッパ、アメリカ、日本など世界的規模でほぼ同時期に起きたが（ペロー 五一、尾形 一、笠間 一二）、朝顔はその現象の洗礼を日米で受けたかたちになっている。

朝顔がどのような「新しい女」であるかは、「六百年にわたる家族の歴史で初めて」というアメリカ見物を実行すること自体にその顕著な特徴をみることができるといえる。私的領域にとどまることが女性の絶対条件とされた時代に、「結婚の申し込みよりもっと真面目な何か」を期待して、未知の世界への探訪に積極的に挑むところに「新しさ」がある。女性を「商品」とみなす日本の男性は「文明には適応しない」と言い、「女が第一ということで有名な国」に「女として行くことを喜ぶ」ということは、伝統的な日本女性とは異なる生き方を模索しているわけだが、何よりもその決断を自らくだしている。「文明の進んだ明治という時代に生まれた近代女性は、きわめてりっぱな心を生まれながらにもっている」として、「自らの選択によって行動する」と宣言

しているのである。

ロングのバタフライが男性の真意を理解できずにひたすら「待つ女」で、ワタナのユキが男性を愛していないから「逃げる女」だとすれば、朝顔は男性との付き合いにおいてもみせるその主体性において、まぎれもなく「新しい女」である。父親が送ってくる「求婚者リスト」を目の前にしても、親や仲人を介した伝統的な結婚がいかに「ばかげているか」を力説するばかりでなく、自らを「改革者」と名乗り、「ノー」という文字が「大文字で頭のなかに刻印されていることを覚えておいてほしい」とさえ宣言しているのである。

朝顔は、公的領域における労働意欲が強いことから「新しい女」とみなすことができよう。「この国においても上流階級に属する」と自分の出自を自慢し、階級意識は強いものの、彼女は渡米後まもなく、在米日本婦人の留守を預かるかたちで、進んで煙草屋の商売に手をだしている。そこが「サンフランシスコでもっとも物騒な地域」であるにもかかわらず、「朝顔煙草店」という看板を掲げ、煙草屋を「高貴な商売」と呼んで、嬉々として金儲けに挑む。「私は女性商人よ」という彼女の言葉は、公的領域で働く「新しい女」の自信に満ちているといえよう。

朝顔の労働体験は、作品終結部では、ニューヨーク五番街の上流家庭における「女中」にまで及ぶ。この体験はやがて『アメリカ日記』の続編『お小間使いの手紙 (The American Letters of a Japanese Parlor-Maid)』(一九〇四年)となるのだが、朝顔は、自ら新聞社に出向いて求職広告をだし、「一ヶ月十二ドル」の職にありついている。「五番街は一流のニューヨーク人を見るには適切な場所」という発言が示すとおり、彼女の労働は生活のためではなく経験のためであり、アメリカ見物の一環であることは間違いない。だが、積極的に労働

に挑む姿勢は、とくに「近代女性史においてもっとも意義深い出来事」といわれる中産階級女性の賃金労働への参入が急速に進み（アモンズ 八三）、「アメリカには若い娘に仕事がある」（ハブケ 二）として、女性単純労働者のアメリカ移住が激増していた当時の労働事情を伝えるものではある。ゴルフに興じたり自転車に乗ったりする活動的な女性を描いたチャールズ・ギブソンの絵は、「新しい女」を表象するものとして当時さまざまな雑誌に掲載され人気を博していたが、朝顔は、ゴルフや自転車などに挑むだけでなく、社会的にめざめ、公的領域で労働することにおいても、二十世紀への転換期におけるアメリカの「新しい女」の特徴を示しているのである。

朝顔が「書く女」であることも、「新しい女」の重要な要件といえるだろう。『アメリカ日記』では日記で、『お小間使いの手紙』では手紙でと、それぞれのスタイルで、自らの意見をしっかりと伝えていく。自分の声をもち、それを伝える言語をもっているということは、抵抗や怒りを涙や忍従で伝える伝統的な感傷小説のヒロインとは異なる特徴である。バタフライは、帰ってこない「夫」の情報を得るためには積極的に行動し、ユキは、自分の友人との「結婚」のいきさつを知った兄がショックのあまり死んだ後、「夫」から逃れ、踊りによって自立しようとするものの、二人はいずれも自分の意見や気持ちを「結婚」相手に伝える有効な手段をもたない。この手段をもっていたら、物語は成立せず、逆に「待つ女」や「逃げる女」であることで物語が展開している。一方、朝顔は、アメリカ人男性の愛の告白も手紙でもてあそぶばかりか、先に言及した「通りで見かけた事柄」というエッセイに加え、小説や詩などの創作にも挑み、リスの視点で社会諷刺をするという「洞穴日記」は作中で長々と紹介されている。⁽⁹⁾ 主人公の文筆力は、「洞穴日記」でもシニカルなアメリカ批判が展

開かれているように、作者の声を効果的に示す手段でもあるのだが、朝顔の視点からいえば、「新しい女」としての武器となる。多様なジャンルの文章を書くことができ、「書く」という手段を使って意見表明しているからである。朝顔には、「母親のように優しく家庭的でない四十五歳以上の女性は意味がない」「アメリカ女性の魅力は細いウエストのカーブにある」という類の、ノグチ自身の本音の表出とも思える「新しい女」にはそぐわない発言も少なからずある。だが、未知の経験に主体的に挑み、積極的に公的領域で労働し、「書く」とで果敢に意見表明をすることにおいて、彼女を「新しい女」と定義することはできるだろう。

バタフライやユキは「小さな」「子どものような」とくり返し形容されているが、朝顔の場合はその言動などが子どもに譬えられることはない。ロティのクリサンサマムのように、「人形」に譬えられることもない。さらには、ユキやクリサンサマムのように、西洋人男性の性的幻想をかりたてるような神秘的なイメージとは無縁である。アメリカ人と比較して身体が「小さい」ことは強調されているものの、人格を確立した人間として描かれている。「新しい女」として朝顔は、身体は小さくても「声」をもち、その声はきわめて大きいのである。

朝顔がこのような「新しい女」に設定されたのは、一つには、ノグチの日本主義がアメリカで助長された結果であったといえるだろう。ノグチは日本にいるときから日本主義的な考えに共鳴し、アメリカにおいても愛国同盟の団体と接触していたといわれるが（亀井 一二五—二九）、そのような国粋主義的な考えがアメリカにおける生活、ひいてはアメリカ大衆小説における日本女性の描かれ方に接して助長されたとみなすことができよう。先に引用した「通りで見かけた事柄」におけるアメリカ女性に対する感想などから判断しても、ノグ

チが「新しい女」の真の礼賛者だったとは考えにくい。むしろ、当時のアメリカにおける「新しい女」現象を利用して、大衆小説における日本女性の描かれ方に挑戦したと考える方が妥当であろう。「日本女性の辞書には、ノーという語がない」「アメリカ人は日本女性がいつも微笑んでいる人形のように思っている」という朝顔の言葉が示すように、アメリカで出版された小説において日本人女性が「ばかにされている」ことに対する挑戦である。朝顔に主体的な生き方をさせることで、「日本が芸者をこえる女性を生みださうる国である」とを示そうとしたといえるだろう。朝顔が交流するアメリカ人が白人の上流階級層の人びとで、とくに彼女がもてあそぶアメリカ人男性がアングロ・サクソン系であるとき、いっそうこの感が強い。

朝顔は、叔父の日記を盗み見するかたちで、当時のアメリカにおける日本ブームを日本人がいかに感じていたかを、つぎのように紹介しているのである。

きわめて不幸だ。私はアメリカにおける日本ブームを何年も観察してきたが、その熱狂はまだ極点に達していない。毎月、日本に関する本が出版されるが、そのページを切るのでさえほんとうに悲しい（実利的なアメリカ人が本のページを切らないままおいとくなんて、実利的ではない証拠じゃないか）。日本を論じるとなるとゲイシャ・ガールやお辞儀の仕方をあげるが、日本にはもっと価値あるものがあるのだ。もしアメリカ人が、たんに紙で作った提灯が好きで日本を愛するというのなら、私たちはその愛を拒絶すべきだ。私はときどきアメリカ人が際だって妄想を好む国民であると断言したくなる。アメリカ人は理性の力を欠いていると感じるのはしょっちゅうだ。私がこのように言うのは、イエロージャーナルの現象を

見てのことではない。

叔父はこのあとアメリカに興行にきたという、川上音二郎と貞奴の一行を思わせる日本の劇団（マークス xiii）についての苦情を綿々と綴り、日本にいれば破産必至のひどい演技にアメリカ人が「金を積みあげた」と、アメリカ在住の日本人としての視点で日本ブームの「実態」を批判している。朝顔をとおしてでは語れないそのブームの実態が、叔父の日記というかたちで示されているのであるが、作者自身の意見がより前面に押し込まれているとみることができよう。アメリカにおける日本ブームに対して、このような苦澁を味わっていたノグチであれば、朝顔をきわめて賢い「新しい女」として創出したのも納得できよう。「新しい女」としての朝顔は、ノグチの意識では、「大日本」の「偉大さ」を表象する格好の手段だったのである。

朝顔が、「新しい女」として描かれた理由の二つ目は、現実の「新しい女」が『アメリカ日記』の制作に関わったためということもできる。その「新しい女」とは、ノグチがカリフォルニア滞在時に交流のあった『サンフランシスコ・コール』の文芸記者ブランチ・パーディングトンと、彼がニューヨークの新聞にだした英文添削者募集の広告に応募してきたレオニー・ギルモアである。後者は、プリンマー大学とソルボンヌ大学に学んだあと、ラテン語やフランス語などを教えていた才媛で、後に未婚のままイサム・ノグチの母となる女性である。ブランチとレオニーは、ともに『アメリカ日記』の英文を添削したのであるが、ノグチは、その内容にまで手を入れるよう手紙で頼んでいる。草稿が残っていないので、二人がどの程度手直したかは不明であるが、ブランチへの手紙では、英語だけでなく、物語の構想や主人公の名前などを相談していた様子がうかがえ

『手紙』三八―四二、レオニーへの手紙では、芸術的なよい作品にするために、自由に自分の考えにそって添削して欲しいとくり返し頼んでいる（五五、六三）。当時のアメリカで最先端の教育を受け、キャリア・ウーマンとして活躍していた女性が、英語を添削する過程で「新しい女」としての朝顔像の創造に積極的に関わったとみなしてよいであろう。

実在の「新しい女」が添削したと思われるところで、もっとも有力な箇所の一つは、朝顔が盗み見る叔父の日記の部分で、日本流の子育てをエマソンの「自己信頼」の考えと結びつけて論じているところである。日本の子どものように、背中に背負われて育てられると「依存性」が強くなるので、エマソンのエッセイを日本の学校に適用して、「自己信頼」の精神を何よりも早期に養うべきだという主張である。ノグチはエマソンをよく読んでいたといわれるが（亀井 一三六）、人間を他の動物と区別するのは「独立心」だと言い、それが失われるのは日本人が背負って子育てをすることにあるという主張は、想像の域をでないが、ノグチが書いた英語を添削する過程でアメリカ女性が加えたものである可能性が強い。二十代の日本青年が子育て論を自ら展開するとは考えにくいことに加え、シャーロット・パーキンス・ギルマンの『子どもたちについて』（一九〇〇）をはじめとする著作の数々でも明らかなように、当時アメリカの「新しい女」の間では、子どもの人権や独立を重視する子育てや幼児教育についても積極的に論じられていたからである。

このように「新しい女」としての朝顔は、アメリカ小説における日本女性像に対する作者の日本人としての反発と、彼の英語を添削した「新しい」アメリカ人女性たちとの意見があいまって創造されたということができよう。アメリカの「新しい女」現象が、大量移民の時代にあって『純粋な』アングロ・サクソン民族が雑

種化する脅威」に対する反動として増長されたという意見もあるように（ルードニック 七三、パンタ 八八）、「新しい女」には白人優越主義の考えがつきまとうが、朝顔も人種差別主義の傾向はきわめて強く、その「新しい女」像が作者の日本主義的意識の強さゆえに発想されたと考えることができるだろう。「黒人はおそろしい」と言って「その種族の美の基準」を問い、サンフランシスコの中国人労働者の臭いを「猿の臭い」に譬えてダーウィニズムをもちだす朝顔であれば、また、そのような人種差別主義がはびこっていた時代でもあれば、「新しい女」としての言動が、日本人として国粹主義的な考えの強さからでているとしても不思議はないだろう。

V 「ゲイシャ」で表象される日本

朝顔は「新しい女」として描かれているが、一方で、その対極ともいえる、アメリカ人が日本女性に抱く伝統的なゲイシャ・ガールのイメージから逃れることができない。というよりも、積極的にそのイメージを拡散している。「ゲイシャが大日本に多大な不当行為を働いていると思う」と言いつつ、朝顔はアメリカ上陸後も、自ら何度も着物を着るばかりでなく、アメリカ人女性に着物を着せる機会も作っている。着物姿のアメリカ人女性とともに「二人の桜娘」なる一幕劇に出演したりもしている。自分に思いを寄せるアメリカ人画家のモデルになったり、写真屋に写真をとってもらうなどして、男性の視線の先に着物姿で立ち、女性の着物姿で読者の関心を誘おうとする作者の戦略のキャンペーンを自ら担っているのである。

着物のシーンにおいて朝顔は、『ミカド』や『ゲイシャ』など、当時人気の演劇で表現された「日本」に違和感を示し、西欧人の日本文化に対する知識の浅薄さなどもそのつど批判してはいる。だが、彼女が着物姿で登場する機会が必要以上に多いこともまた事実である。これは、彼女が作者の批判を代弁する役割を担っているだけにとどまらず、大衆受けをねらう作者の作戦道具としてその「美しい」身体を利用されていることでもあり、ノグチにとっては、主人公が女性でなくてはならない条件の一つであったといえるだろう。朝顔は着物姿で写真をとるとき、中国の扇子を用意する写真屋の日本文化に対する無理解を怒りながら、その後できた写真をアメリカ中の出版業者に売って金を作る可能性について述べているが、このシーンは朝顔が作者の代弁者としてばかりでなく、その身体を利用され、さらには諷刺の対象にさえなっていることを示しているといえよう（マークス xiii）。

女性が着物姿で登場するシーンが多いということは、それ自体が日本趣味を期待する読者を満足させるだけでなく、着物を着た女性の姿を挿絵として使うこともできることになる。実際『ポピュラー・マンズリー』に連載された部分だけを見ても、ふんだんに着物姿の挿絵が用いられている。第一回連載の十三頁のうち全頁の挿絵が四枚も使われ、そのうち三枚が着物、または着物をガウン風に着た「キモナ」姿の朝顔である。第二回連載も同様で、九頁のうち、全頁の挿絵が二枚、半頁の挿絵が一枚であるが、前者の二枚では、朝顔はいずれも昔者のような髪型と着物姿で登場している。いずれの回も、一枚はフルカラーの挿絵が用いられている。二十世紀初頭のアメリカにおける日本小説ブームのなかで書かれたロングやワタナの小説に対する反発と、そのブームに便乗して富と名声を手に入れようとした目論見とを織り込んだノグチの作品は、「新しい女」に着

物を着せ、日本を芸者らしき女性で表象させる結果になったといえるだろう。

ノグチはアメリカ人の挿絵画家による挿絵が自分の作品に掲載されることを願っていたが、『ポピュラー・マンスリー』の編集長セジウィックが日本人の挿絵画家に依頼することを主張し（『手紙』 六一）、結局は、ワタナの『日本鷺』の挿絵と同じくエトローが担当することになる。この挿絵は、ストークス社から出された単行本でもそのまま使われ、ワタナの小説を批判することが執筆の動機の一つであったにもかかわらず、彼女と同じ日本人挿絵画家による日本趣味に徹した挿絵をふんだんに使った本となった。しかも、日本小説や日本演劇などにおける西欧人の着物の着方についても厳しく批判している朝顔が、日本人にはだらしないう着方としかみえないキモナ姿で二回も登場し、テキストにおける批判を帳消しにする挿絵となっている。キモナは、当時、シカゴのデパートの通信販売カタログにも登場していたことからすれば（見玉 二四—二八）、キモナ姿の朝顔の挿絵を掲載したのは、中産階級の女性読者を意識した編集者の意向であったとも考えられる。だが、それによって、表紙や挿絵しか見ないアメリカ人には、ワタナの小説と見分けがつかないできあがりになったうえに、売れゆきに関しては、ワタナの小説を大きく下まわり、ノグチは続編の出版も断られる結果となったのである（『手紙』 九三）。

本を買う側に、ワタナの本と変わらない印象を与えたと思われるのは、主人公の日本女性の名前そのものに関しても同様である。ノグチは、主人公の名前を「お蝶さん」「桜さん」などと変えながら（『手紙』 三八、四二）、最終的に朝顔としたのであるが、この名前さえも、当時の日本ブームをそのまま反映したものである。ロティの「菊」にはじまり、ロングの「蝶」「桜」、ワタナの「梅」「ツツジ」「藤」など、日本女性小説には、

花鳥風月をあしらった美術工芸品から抜けでたような女性として描く目的のためか、花など生き物の名を配した登場人物が多いが（リトルウッド 六四―六五）、とくに朝顔は日本美術と同義語になるほど人気を博した花のモチーフの一つだったという（宇沢 二三）。この人気を裏づけるように、ロングが「バタフライ」を発表した『センチユリー』誌の一八九七年十二月号には、「日本のすばらしい朝顔」と題した、イライザ・シドモアの記事が掲載されている。シドモアは、ワシントン・D・Cのポトマック河畔に桜を植えることを推進した人物としても知られているが、その記事では、「菊よりもずっと日本独特の花」（二八一）として朝顔を紹介している。ノグチの名前を隠し、日本女性による日本女性の物語というスタンスを保った本は、挿絵ばかりでなく、作者として付された主人公の名前によっても、日本趣味を読者に印象づけようという商業的な努力がみられるのである。その結果、「菊」や「蝶々」の批判から始まった「朝顔」の物語は、その批判対象の亜流と甘んじることになったといえるだろう。

日本女性小説のブームにのって富と名声を得たいと願いながら、そのブームの批判を随所に織り込んだノグチの小説は、「新しい女」に伝統的な「ゲイシャ」を演じさせることになり、結局は、彼が当時人気の日本小説を批判する際に用いた言葉どおり、「片方の足に靴を履き、もう片方に下駄を履いている」感の強い小説となった。いくつかの書評が言い当てているように、日本人が書いた小説であることは明らかな内容であり、他の日本小説とは「たしかに異なっている」が（『外国通信社の意見』二一、四、六）、当時のアメリカの大衆読者が必ずしも求めていたものではなかった。朝顔が着物姿で三味線を弾いて端唄をうなる一方で「新しい女」の心意気を説き、日本の美の真髄が「簡索性」にあると説いても、アメリカの読者には、その「ちぐはぐさ」

の方が印象に残ったのかもしれない。ワタナがその後も十年以上にわたって次つぎと日本女性のロマンス小説を発表したことを考えれば、アメリカの読者は、朝顔が「唐人が書いた日本小説なんて：笑ってしまう」と批判していた「青い眼の日本娘」が登場する「ちぐはぐさ」の方を選んだということであろう。

ノグチの小説の「ちぐはぐさ」は、作品に類出する一つの語「ジャップ」によっても説明されるように思われる。ノグチはこの差別語を、日本主義、人種差別主義、エリート主義の強い朝顔に「この語の音が好き」と言わせてたえず使わせているが、その姿勢こそが、日本を芸者以上の何かで表象しようと試みながらアメリカの読者に媚びて朝顔に芸者らしき格好をさせたことに通じていよう。しかし、それも、さしたる後ろ盾や金もなく十八歳で渡米したノグチが、アメリカでの生き残りをかけて挑んだ作戦だったと考えれば、さほど驚くことではない。その意味では、朝顔の物語が大衆雑誌に掲載され、単行本を出すまでになり、結果として、帰国後日本文壇や教育界での地位を確保することの一助になったことで、ノグチの作戦の成功を認めなければならぬのかもしれない。だが主人公の朝顔は、そのために作者の代弁者としての役割を担わされただけでなく、作者の道具として女性としての身体を提供しなければならず、ときに作者のからかいの対象にまでもなってしまうことは否めないのである。

注

(1) 引用部分の邦訳は、『アメリカ日記』については、野口米次郎訳を参照。ただし、野口の日本語は長い滞米生活の影響のためか、不自然なところもあるので、必要によって修正した。また、『見界と幽界』という邦訳は、ノグチ自身のものである(ドウス 三〇)。その他については拙

訳。

- (2) ワタナ自身、『日本鷲』が二十万部売れたと述べているが、その数は実証されていないという(ホーニー、コール 五)。
- (3) 『ポピュラー・マンズリー』の記事については、五十三巻を参照。
- (4) 『ポピュラー・マンズリー』に掲載された「アメリカ日記」は、全頁版の挿絵六枚を含む挿絵を多数掲載しながら、合計二十二頁に圧縮されている。ノグチは編集者が「ものすごく圧縮した」と言い、ミス・スペリングが多いと友人宛の手紙で嘆いているが(『手紙』 六八)、日本語の間違ひが多いものの、作品自体の印象は単行本として出版された完全版とあまり変わらず、作品のエッセンスを伝える圧縮版になっている。
- (5) ベラスコによる「バタフライ」劇成功の秘訣は、彼自身の分析によれば、バタフライが一晩苦しみの中に夜を明かすという設定で、照明の変化をつけて十四分間の沈黙のシーンを作ったことにあるという(マイナー 五九)。バタフライの苦悩をこのように演出することで、ロングが描いた品のない、理解力の乏しいドタバタ調のバタフライ像が、悲劇のバタフライ像に変化したと思われる。
- (6) ヨーロッパの「ムスメ」小説については、ロテイ以前のそれも含め、岩田和男「むかし、ムスメ小説があった―『蝶々夫人』と日本女性のイメージ」に詳しい(四一―五八)。
- (7) エトーによる『日本鷲』の装丁は、「昨今の装丁のうちでもっともユニークにして芸術的な見本の一つ」と美術誌などで評価されていたという(宇沢 二二)。
- (8) ノグチ自身は、自伝において、自分がアメリカでいかに英語に苦労したかを、「一語たりとも正しい発音を教えてくれなかった」日本の教師への恨みさえ込めて書いている(三六)。
- (9) 「洞穴日記」は、朝顔がアメリカのハイネといわれた詩人宅に逗留中に書いたという設定であるため、作者が判明してしまうという理由で『ポピュラー・マンズリー』には掲載されなかった部分である。ノグチ自身はそのことを残念がり「チャーミングな部分」とさえ呼んでいる(『手紙』 六三)。また、この日記には、バタフライが黄色く顔を塗るたくって洞穴の前を何度も通り、下等な笑いを投げかける、とロングの「バタフライ」批判をくり広げている部分もある。

引用文献

- Ammons, Elizabeth. "The New Woman as Cultural and Social Reality: Six Women Writers' Perspectives." Heller and Rudnick 82-97.
- Banta, Martha. *Imagining American Women: Idea and Ideals in Cultural History*. New York: Columbia UP, 1987.
- Cruz, Barbara C., and Michael J. Berson. *The American Melting Pot? Miscegenation Laws in the United States*. 31 Jan. 2007 <<http://www.oah.org/pubs/magazine/family/crus-berson.html>>.
- Hapke, Laura. *Tales of the Working Girl: Wage-Earning Women in American Literature, 1890-1925*. New York: Twayne, 1992.
- Hart, James D. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. Berkeley: U of California P, 1950.
- Heller, Adele, and Lois Rudnick, eds. 1915: *The Cultural Moment, the New Politics, the New Woman, the New Psychology, the New Art, and the New Theatre in America*. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.
- Honey, Maureen, ed. *Breaking the Ties that Bind: Popular Stories of the New Woman, 1915-1930*. Norman: U of Oklahoma P, 1992.
- , and Jean Lee Cole. Introduction. *Madame Butterfly and a Japanese Nightingale*. New Brunswick: Rutgers UP, 2002. 1-21.
- Hosley, William. *The Japan Idea: Art and Life in Victorian American*. Hartford, CN: Wadsworth Atheneum, 1990.
- Hwang, David Henry. *M. Butterfly*. New York: Plume, 1986.
- Littlewood, Ian. *The Idea of Japan: Western Images and Western Myths*. Chicago: Ivan R. Dee, 1996.
- Long, John Luther. "Madame Butterfly." *The Century Illustrated Monthly Magazine* 55. 3 (January 1898): 374-92.
- . "Amachodosama." *Madame Butterfly*. New York: Grosset, 1903. ix-xv.
- Loti, Pierre. *Madame Chrysantheme*. 1887. McLean, VA: Indy Publish. com. n. d.
- Marx, Edward, and Laura E. Franey, eds. *The American Diary of a Japanese Girl*. Philadelphia: Temple UP, 2007.
- Meech, Julia, and Gabriel P. Weisberg. *Japonisme Comes to American: The Japanese Impact on the Graphic Arts, 1876-1925*. New York: Harry N. Abrams, 1990.

- Miner, Earl. *The Japanese Tradition in British and American Literature*. Princeton: Princeton UP, 1958.
- (Morning Glory.) "The American Diary of a Japanese Girl." *Frank Leslie's Popular Monthly* 53. 1 (1901) : 69-82; 53. 2 (1901) : 192-201.
- Morning Glory. *The American Diary of a Japanese Girl*. New York: Frederick A. Stokes, 1902. 『邦文 日本少女の米國日記』野口米次郎訳 東京 東亜書房 一九〇五年
- Morning Glory (Yone Noguchi). *The American Letters of a Japanese Parlor-Maid*. Tokyo: Fusano, 1904.
- Noguchi, Yone. "Onoto Watanna and Her Japanese Work." 『木蘭』13. 8 (1907) : 18-21; 13. 10 (1907) : 19-21.
- . *The Story of Yone Noguchi*. 1914. Philadelphia: Jacobs, 1915.
- . *Yone Noguchi Collected English Letters*. Ed. Ikuo Atsumi. Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975.
- "Opinions of the Foreign Press on "The American Diary of a Japanese Girl." *The American Diary of a Japanese Girl*. Tokyo: Fusano, 1904. 1-6.
- Perrot, Michelle. "The New Eye and the Old Adam : Changes in French Women's Condition at the Turn of the Century." *Behind the Lines: Gender and the Two Wars*. Ed. Margaret Randolph Higomet et al. New Haven: Yale UP, 1987. 51-60.
- Rudnick, Lois. "The New Woman." Heller and Rudnick 69-81.
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York: Penguin, 1978.
- Schmorc, Eliza Ruhannah. "The Wonderful Morning-Glories of Japan." *The Century Magazine* 55. 2 (1897) : 281-89.
- Shea, Pat. "Winifred Eaton and Politics of Miscegenation in Popular Fiction." *MELUS* 22. 2 (1997) : 19; 33. 15 Jan. 2007 <http://findarticles.com/p/articles/mi_m2278/iss_n2_v22/ai_20175891>.
- Stember, Charles Herbert. *Sexual Racism: The Emotional Barrier to an Integrated Society*. New York: Harper, 1976.
- Van Rii, Ian. *Madame Butterfly: Japonisme, Puccini, & the Search for the Real Cho-Cho-San*. Berkeley: Stone Bridge, 2001.
- Watanna, Onoto. *A Japanese Nightingale*. New York: Harper, 1901.

… *Miss Nime of Japan: A Japanese-American Romance*. 1899. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1999.

Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly* 18 (1966): 151-74.

ドウス昌代 『イサム・ノグチ 宿命の越境者』第一巻 講談社 二〇〇三年

羽田美也子 『ジャポニズム小説の世界 アメリカ編』彩流社 二〇〇五年

岩田和男 「むかし、ムスメ小説があった―『蝶々夫人』と日本女性のイメージ』『異文化への視線 新しい比較文学のために』佐々木英昭編 名古屋

屋大学出版社 一九九六年 四一―五八頁

亀井俊介 『ヨネ・ノグチの日本主義』『詩人ヨネ・ノグチ研究』外山卯三郎編第三巻 造詣美術協会出版局 一九七五年 二二〇―五三頁

笠間千浪 『ジェンダー秩序による〈セクシュアリティ〉編成とフェミニズム言説―その限界と可能性の分岐点』『ジェンダー・ポリティクスのゆく

え』神奈川大学人文学研究所編 勁草書房 二〇〇一年 一一―五四頁

川田順造 『人類学的認識論のために』岩波書店 二〇〇四年

児玉実英 『アメリカのジャポニズム 美術・工芸を超えた日本志向』中央公論社 一九九五年

楠戸義昭 『もうひとりの蝶々夫人』毎日新聞社 一九九七年

大串尚代 『ハイブリッド・ロマンス アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』松柏社 二〇〇二年

尾形明子 『『青鞥』の女たち・その5―バッシングの嵐のなかで』『新しい女』宣言』31 Oct. 2003 <<http://www.jk.sk.jp/j/kye/200301.htm>>.

巽孝之 『メタファーはなぜ殺される 現代批評講義』松柏社 二〇〇〇年

鳥越輝昭 「見ぬ世の人を描くには―『蝶々夫人』のことなど』『神奈川大学評論』55 (2006): 125-28.

宇沢美子 「朝顔の描き方 ヨネ・ノグチとエトウ・ゲンジロウのジャポニスム遊戯』*AALA Journal* 10 (2004): 17-33.

*本研究に対して、神奈川大学より特別研究費(共同研究「表象としての〈日本〉―国際日本学の新展開)の援助をいただいた。ここにその旨を記し、感謝の意を表する次第である。